

山口大学衛生学のこと

島根県浜田保健所 中本 稔

E-mail nakamoto-minoru@pref.shimane.lg.jp

私が衛生学に着任したのは1991(平成3)年4月。教室は原田、岩本、廣澤、石居、米谷(敬称を略させていただきます)に中本の6名でした。医学部の基礎棟が建て、1.2年の新しい研究室で、西側には旧基礎研究室・講義棟・RI実験棟があり、歴史ある大学を物語っていました。その後、取り壊されて、現在の実験センター・講義棟・医心館・霞仁会館が建ちました。

情報処理&PC

当初は統計処理といえば大学計算機センターの大型コンピュータが基本で、山大と九州大の情報センターを利用していました。教室の端末はPC9801Fで基礎棟1階分室にも端末がありました。研究室PCではMS-DOS・PC9801かMACが全盛の時代でしたが、LANが設置されるとWindows NTのIBM互換PCを購入しました。当時のMACもそうですがWindows PCはフリーズ・リセットが当たり前でした。その後、山大情報処理センターにもSASが入り、学生実習では生存曲線や比例ハザードモデルの計算を行いました。

統計の研究会

原田先生が大学院の統計学を担当していたことから、公衆衛生学の先生方と統計の事例を持ち寄る研究会を開催しました。国立公衆衛生院の丹後俊郎先生に講演していただいたことがあります。

保健所実習

夏休み期間中に2,3日程度、基本は出身地の保健所を訪問し公衆衛生活動を学ぶ実習を行いました。学生が希望する全国(西日本が中心)の保健所と連絡とって受入れの確認を行いました。帰省しない学生や県内出身の学生たちの受け入れは、宇部を中心に県内の保健所に多数をお願いしました。滝川先生(宇部市、宇部フロンティア大)との出会いもこの頃です。

夏の地域保健実習

1度だけでしたが、1年生の夏の企画と農村医学のフィールド探しを兼ねて、山陰の市町をまわりました。須佐町では台風接近で在宅訪問ができなかったこと、阿武町では課長さんが宿に差し入れしてくれたことが思い出です。この時参加してくれた学生は本村先生(沖縄中部病院)、亀谷先生(名古屋徳洲会)です。私は10年後に須佐町の健康づくり計画策定に関わることになりました。

老人施設体験実習

新入(1)年生の早期体験実習として山口(小郡を含む)地区の特別養護老人ホーム・老人保健施設の体験実習を開始しました。当初は衛生学の教員全員で1年生と施設を訪問しました。実習の開始にあたり山口県庁に挨拶に行くに対応してくれた当時の保健部次長は厚生省から出向していた烏帽子田先生(広島大学公衆衛生学)でした。また、体験を整理するために体験チェックリストを作成しましたが、米田先生(医療短大、保健学科、宇部フロンティア大)、涌井先生(宇部短大、宇部フロンティア大、関西大)にお世話になりました。藤村先生(県立大)、吉村先生(県立大)と出会ったのもこのころだと思います。

Laskar先生との出会い

福岡国際空港にLaskar先生(Bangladesh)を迎えに私の車で行きました。Bangladeshのお土産にとタバコを手渡そうとしてくれましたが、私も含めて教室の全員がタバコは吸わないと話したことを覚えています。

宇部市の退院情報連絡システム

大学病院を退院する患者で在宅かかりつけ医が決まっていない患者に対して、保健所が窓口になり医師会がかかりつけ医を紹介するというシステムを宇

部市が立ち上げました。大学の河合先生(整形外)と同時期に部会に参加しました。介護保険制度が始まるとこのシステムが在宅医療と介護保険の連携基盤となり、後に保健文化賞の受賞につながります。部会のメンバーと北九州の福祉法人施設をバスで見学に行ったことも思い出です。

山口ヘルスプロモーション研究会

保健所の砂川先生(菽かがやき)、茶川先生(岩国医師会病院)たちと研究会を立ち上げました。健康日本 21 の県計画、保健所圏域計画、市町村計画の作成に関わる保健師、栄養士もたくさん参加してくれました。後に小林先生(県立大看護、広島大保健学科)も参加してくれました。

国際医療研究会

タイを旅行してきた学生 3 名が国際保健のサークルを作りたい、顧問になってほしいと話があり、引き受けました。タイからの学生 3 名を受け入れるにあたって国がビザを出すための保証人になったことが忘れられません。この国医研に関わった卒業生には、西嶋先生(厚労省)や高山先生(長野佐久病院、沖縄中部病院)、長谷先生(衛生学)がいます。

助講会

医学部の助教授、講師で構成された助講会に所属していましたが、山下先生(脳外)、福田先生(内科)が会長のとき、副会長を引き受けました。助講会では特に臨床講座の先生方からは山口大学医学部の発展のための熱い思いが伝わってきました。

大学医学部生協

医心館の開設に合わせて、医学部単独で大学生協を立ち上げました。岸田先生(解剖、横浜市大)、中村先生(生理)、前川先生(救急)、反町先生(法医、青森県保健所、大妻女子大)、辻先生(歯口腔外)ほかが設立時の教員理事でした。山大全学の生協設立につながりました。

宇部協立病院内科

週 1 日だけ内科外来の診療をしていました。病院医局の多くが山口大学卒業の先生方でした。先生方の診療を通して地域医療を担う責任を学びました。後に、専任手話通訳者の健康診断を請け負うときに、振動障害の臨床検査を行っていた協立病院に協力をいただきました。

2003(平成 15)年、私が衛生学を辞め県立大学看護学部に移るときは、井上先生、竹中さんがいました。私の後に内科から上田先生(環境研、京都大学)が来られました。この間、私は非常勤講師で年 1 回の講義を行ってきました。講義に来るたびに衛生学の丸いテーブルに座ります。私が山口に来たときからテーブルは変わりません。ここで夜遅く実習のまとめをしていた長崎出身の学生が原爆体験の学習について話をしてくれたことも覚えています。この丸テーブルで色々なことを考えて先生方や学生と議論したことが、大学のアカデミズムの象徴だったように思います。

2 年間の初期研修が義務化され、全国的にも基礎研究や社会医学研究へ進む医師は少なくなりました。制度導入前の私がいる間に山大卒業生が衛生学に入らなかったことが気がかりでしたが、2013(平成 25)年、長谷先生が衛生学に来てくれたことが救いです。

研究活動もネットワークやソーシャルキャピタルが大事だと考えます。衛生学に集まる先生方や振動障害研究に関わる先生方とお付き合いすることで、私なりに生きる道を決めてきたと思っています。

原田先生と愛媛で出会ったのが学生時代の 1981(昭和 56)年。1985(昭和 60)年夏、恩師木村慶先生が松山道後で主催した社会医学研究会(現在の社会医学会)の手伝いをして同期の河野先生(愛媛大、愛媛県)と一緒に社会医学・公衆衛生の仕事をすることを決めました。あの時、原田先生が研究会に誘ってくれたことが、私が山口に来るのが必然だったのだと思います。15 年で山口を離れることとなった不肖の弟子ではありますが、これからもお身体に気を付けて、後輩を見守っていただくようお願いします。